生まれてきてくれて、ありがとう

帆花

ほのか

監督・撮影：國友勇吾　撮影：田崎絵美　編集：秦岳志　整音：川上拓也　音楽：haruka nakamura　プロデューサー：島田隆一　製作：JyaJya Films＋roa film　配給：JyaJya Films

配給協力・宣伝：Regard　助成：文化庁文化芸術振興費補助金（映画創造活動支援事業）｜独立行政法人日本芸術文化振興会　2021年｜日本｜72分｜DCP｜ドキュメンタリー　©JyaJya Films＋roa film

文部科学省選定
少年・青年・成人・家庭向き

honoka-film.com

安全圏からお気楽に、「いわゆる美談」として消費できるような作品では、まったくない。むしろ観客は、次々と湧き上がってくる複雑な感情や思考と絶えず格闘し、かつてないほど深く重く、「人が生きるということ、生きているということ」の本質を、己自身に問い直さざるを得なくなるだろう。その上でなお……何よりも帆花さんの生そのものが放つ力と、それを最大限引き出し受け止めてみせるご夫婦の覚悟、その驚くべき強さと豊かさ、美しさが、我々を圧倒するのだ。

ライムスター宇多丸（ラッパー/ラジオパーソナリティ）

答えのない映画だ。でも、そもそも、子育てには答えなんかない。言葉は、コミュニケーションを楽にしてくれるけれど、関係を複雑にもする。楽になったり複雑になったりするうちに見失うものも多い。帆花ちゃんとご両親との関係は、究極にシンプルで、だからこそ本質的な問いなのだと思う。

俵万智（歌人）

帆花さんが家族や縁のある人たちの中にいて生まれる暮らしを見ていると、命は一人で生きるものではないことが染み入るように伝わってきます。揺れながら、慈しみ、そこに一緒に「いる」だけで生まれる幸せもある。人のできるできないを測りすぎる物差しを手放して、多くの方に映画を見てほしいと思います。

岩崎航（詩人）

ほのかちゃんを取り囲む世界に触れて
幸せな気持ちを
あなたもこの映画でお裾分けしてもらってくださいませ。
わたしはとてもあたたかな気持ちになりましたよ。

一青窈（歌手）

見えない、聞こえない、動けない、機械がなければ呼吸もできない。それでも彼女が問いかけにわずかに反応を返すことに、成長と共に少しずつ変化していることに、家族は気づいている。生きている意味があるのかという心無い声や、的外れな同情は気づけない。動けない体に、本当は魂が満ちていることに。枯れた木の、根はひそやかに春を待っていることに。

寺尾紗穂（文筆家／音楽家）

あなたとわたし、そのふたつの関係をつなぐものは言葉だけなのだとずっと思っていた。だけどぼくも我が子を迎えてみて、それは過ちだったと気づいた。
まだ言葉を発さないはずの彼らに対して、あふれるものがあった。どぼんどぼんと尽きることなくあふれてくるこれは、どこから？
その源は、体温にあった。あなたの体温とわたしの体温をわかちあったときに、関係が始まっていたのだ。
映画『帆花』は、体温を思い出させる。沈黙のままに、あなたとわたしをつないできた大切な人の体温を。

齋藤陽道（写真家）

画面のなかで時々映る理佐さんの手は痛々しく荒れていた。対照的に帆花ちゃんの顔はつやつやとして輝いていた。理佐さんの手を見るたび自分の母を思い出した。毎日の水仕事で同じように荒れていたことを。そして帆花ちゃんを見ていると自分の娘と重なった。映画撮影時の彼女と娘は同じ年頃なのだ。
自分は超高齢出産だったのだが、ほぼ同じ年齢で同時期に出産した20年来の友人がいる。その友人と、子どもが生まれてから部屋のなかが明るくなったね、という話をしていたら、ポツリと彼女がつぶやいた。「もうこの太陽がない生活は考えられないなあ」と。わたしたちは知った。子どものいのちがどれくらい周りを明るく照らしてくれているかを。そして思い出した。自分の手が荒れることよりも子どもの世話を優先してくれる親がいることを。
この映画を通して、いのちを見守っていくことの厳しさと、それとともにある美しさを見せてもらえた。

川内倫子（写真家）

誰もが考えるのが「もし自分が帆花ちゃんだったら」「もし自分が帆花ちゃんの親だったら」ということだろう。でも、それはとても想像の及ぶことではない。結局、自分はどちらでもないから、一時的に考えるだけで忘れてしまいがちだ。でも、私たちは「帆花ちゃんの周りの人たち」のひとりだ。それは「もし」ではなく、現実だ。映画の中で帆花ちゃんのお母さんが言っていた。「世の中にあたしと帆花の二人っきりみたいな気分になるときがある」と。こういう映画が撮られ、それを見る人たちがいることの大切さを、とても感じた。「多くの人に見てもらいたい」という決まり文句に、本気をこめられたらと願う。

頭木弘樹（文学紹介者）

生後すぐに「脳死に近い状態」と宣告された帆花ちゃん。母親の理佐さん、父親の秀勝さんと過ごす家族の時間にカメラは寄り添う。ありふれた親子の日常の中で積み重なり、育まれていくもの。動かなくても、言葉を発しなくても、ふれあうことで通じあい、満ちていくもの。帆花ちゃんの手の柔らかさとぬくもりに、生を実感して心が震えたという國友監督が紡ぎ出す、いま、この社会に私たちとともにある、帆花ちゃんと家族の物語。

帆花（ほのか）

@honoka_film　fb.com/honoka.film　honoka-film.com

2022.1/2（日）より
お正月ロードショー
全国共通鑑賞券￥1,200（税込）発売中

初日舞台挨拶開催決定！
國友勇吾（監督）、**島田隆一**（プロデューサー）、**西村家のみなさん**（出演者/リモート登壇）
ほか劇場イベントも実施予定！
詳細は公式サイトをご確認ください

ポレポレ東中野
03 3371 0088 pole2.co.jp
JR東中野駅西口改札北側出口より徒歩1分
都営大江戸線A1出口より徒歩1分
全席指定／オンライン予約有り